

『17歳のカルテ』 原題 Girl, Interrupted 1999



映画批評

『17歳のカルテ』 原題: Girl, Interrupted 1999

～自分の居場所を見失った人が新たに見つける方法とは…

塚田三千代（翻訳家・映画アナリスト）

1960年代、アメリカ社会富裕層の父母に反発する娘の深層心理と、フロイト精神分析に基づく治療を行う女性専用精神病棟の内側を描いた映画作品である。

映画の原題は原作の回想録と同名の Girl, Interrupted という。これは17世紀オランダの画家フェルメール (Johannes Vermeer, 1632-75) の『稽古の中断』<<Girl Interrupted at Her Music>> (1660) に因んでいる。この絵には音楽レッスンを中断されて戸惑う少女が描かれているが、著者はレッスンを中断されて戸惑う少女とスザンナの心底にある感性をたぶん重ねあわせたのであろう——。映画はスザンナ・ケイセンが精神病院に入院し、そこで約1年間を共に過ごした患者(少女)たちや、医師や看護師との交流を日記に書き、それを退院後に出版した回想録に基づいて製作された。

場所はボストン近郊。時代は 1960 年代——。ウーマンリブやベトナム戦争や公民権運動・キング牧師暗殺、ウォルト・デズニーのテーマパークがフロリダ進出、LSD、‘疑惑の時代’ (a time of doubt) という言葉が TV で流行語となった時代である。映画シーンの背後に、サイモン&ガーファンクルの『ブックエンド』や、ベトウラ・クラークの『恋のダウンタウン』やスキーター・デイヴィスの『エンド・オブ・ザ・ワールド』の曲が流れて細やかな雰囲気演出している。

スザンナは、同級生が名門大学へ続々と進学することに無関心で、ひとり孤独に落ち込み、無力感にとらわれ、狂気か正気か不透明な精神状態になる。大量のアスピリンとウォッカ1瓶を飲んで自殺を図った。救急病院に運ばれて一命を取り留めた後、ゆっくりとした休養が必要という助言をうけて入院することになった。2、3日で帰宅できるはずが、意に反して退院させてもらえない。なぜ自分が狂人と同じ病棟にいるのかが分からないまま女性専用病棟で過ごす。それはフロイト精神分析理論によってセラピー治療と薬物療法を合わせて行う本拠地、クレイアム精神病院であったから。

やがて、彼女にも正気と狂気の差が分かり始める。病棟で暮らす少女たちは自分よりもっと深い心の闇を抱えていることを——。たとえば、脱走を繰り返してはまた連れ戻されるリサは反社会性人格障害 (Antisocial Personality Disorder) と診断され、ジョージーナは空想虚言症 (Phantastic Pseudology)。デージーは神経性大食症 (Bulimia Nervosa)、ジャネットは神経性無食症 (Anorexia Nervosa)。ポリーは反抗挑戦性障害 (Oppositional Defiant Disorder) から外傷性ストレス障害 (PTSD) へと。スザンナは境界性人格障害 (Borderline Personality Disorder) と診断されていた。

外の世界へ戻るにはどうすればよいか。セラピーで医師に心底を告白し、日記に自分の観察したことを書くこと。こうすることでスザンナは回復への道を進んでいく。書店で働き、作家になること…を告白してはじめて退院が許された。

映画の英語

英語は、精神病棟で治療を受ける患者の少女たちが仲間同士や医師や看護師と交わす状況の中での会話やコトバである。精神分析で使う用語、病名と薬品名、セラピストと患者との会話——これらから、フロイト精神分析による夢や心の深層を分析してその根源を明らかにしようとするプロセスを窺がえる。

スザンナ・ケイセン (Suzanna Kaysen) の病名、境界性人格障害とは自己像や人間関係で情緒不安定、倒錯状態になり、自傷行為 (手首をひっかいたり、傷つけたりする) に至る成人期

初期に起こりやすい症状をいう。彼女の診断所見 (diagnostic impression) には、境界性人格障害 (Borderline Personality Disorder)、障害 (disturbance)、自己像・対人関係・情緒の不安定 (instability of self-image, relationships and mood)、目的の不明確さ (uncertainly about goals)、衝動的行為 (impulsive in actives)、気まぐれなセックス (casual sex)、自傷行為 (self-damaging)、社会的矛盾 (social contrariness)、厭世的な態度 (pessimistic attitude) が観察されると記されている。これを見て少女たちは淫乱 (promiscuous) などというコトバを口々に平然としゃべる。

以下で、スザンナと医師が交わした会話を日・英でたどってみよう。

スザンナが病院でリサや他の少女たちと過して、1年が経ち、そこが自分の居場所のように感じはじめた頃、狂気から回復するには——正気という外の世界 (= 日常生活) へ戻るためにはセラピーを受けて、自分の心の奥底を告白し、原因を明確化する方法を見つけなければならない、と気づく。その過程は次の会話から推測される。

スザンナの主治医のウィック医師は、問題は心の底流にある人生の不思議な暗流 (mystical undertow in life)、つまり、影の流砂 (quicksand of shadows) の扱い方だという。「アンビヴァレンスは両方向に働く強い感情のことをいうのです (Ambivalence suggests strong feelings opposition) が、あなたが今直面しているのは、人生の岐路に立って、自分の弱さに甘えて病院暮らしをしている。それでいいのですか?」(The choice of your life. How much will you indulge in your flaws? If you embrace them, will you commit yourself to hospital for life?)と問う。ヴァレリー看護師は「あなたは怠け者で赤ん坊、自分で狂人になりたがっているだけ」(You are a lazy, self-indulgent little girl who is driving herself crazy.)と、スザンナを手厳しく叱責する。

その後にスザンナは回復に向かって進む。「考えをコントロールするのは難しいけど、外の現実世界へ出て分かったのは、物事をまた感じ始めるということです。外の世界へ戻る方法は一つだけあるわ。頭を使って話すことよ。言葉が先に出てきます。」(A thought is a hard thing to control. Out in the real world. All I know is that I begin to feel things again. I knew there was only way back to the world and that was to use the place to talk. My tongue becomes this intrusion.)とスザンナは言う。心の深層を言葉で話す場を見つけたことによってスザンナは回復していく。

会話シーン1 SP. P.54

メルヴィン医師のセラピーで質問に応えるスザンナだが、これでは求める答えになっていない。

MELVIN: I understand you tried to kill yourself last week.
Anything you want to tell me about that?

SUSANNA: I had a headache.

MELVIN: So, I assume you took the recommended aspirin dosage for a headache.

SUSANNA: I didn't try to kill myself.

MELVIN: What were you trying to do?

SUSANNA: I was trying to make the shit stop.

MELVIN: The time jumps, the depression... the uh, headaches, the thing with your hand?

SUSANNA: All of the above.

MELVIN: I see. Susan. What is it? Are you, are you puzzled as to why it is I have to be in a mental institution.

「君は先週自殺しようとしたね。それについて何か話したいことはあるかな。」

「頭が痛かったの」「それなら、頭痛にふさわしい服用量のアスピリンを飲んだはずだが」

「自殺しようとしたわけじゃないわ」「何をしようとしていたんだ？」

「くだらないことを終わらせたかったの」

「時が一足飛びに移ること、落ち込み…頭痛、君の手のことか？」「それすべてよ」

「そうか、スーザン。何なんだ？君は、君が悩んでいるのは何なのだ？」

「そうよ。そうだと思う、メルヴィン。なぜ自分が精神病院にいないといけけないのか、と悩んでいるのかも」

会話シーン2 SP. P.178

スザンナが退院して帰る家路で、タクシーのなかで自分に語るモノローグである。

SUSANNA: (v.o.) If you ever wished you could be a child forever. They were not perfect, but they were my friends.... And by the Seventies, most of them were out, living lives. Some I've seen... some never again. But there isn't a day my heart doesn't find them.

(画面外)「…ずっとこのまま子供でいたいと願うことがあったら…。彼女たちは完璧な人間じゃなかったけれど、わたしの友達だった。そして、70年代までに彼女たちのほとんどが退院して社会復帰していた。何人かにはあったが…会えなかった人たちもいた。けれど、1日として彼女たちを思い出さない日はない…」

【映画史リテラシー】

- 原作は発表当時ベストセラーとなり、続いて映画也大ヒットした。
- 映画のリサ役を、今や大女優となったアンジェリーナ・ジョリーが、当時はまだ駆け出しでありながら、凄味のある演技で演じて、第72回アカデミー賞の助演女優賞を受賞した。
- ・ゴールデングローブ賞助演女優賞 ・全米映画批評家協会賞新人賞

●参考資料

DVD: ソニー・ピクチャーズ エンターテインメント(株)

原作: Girl, Interrupted. 1993. Susanna Kaysen (1950-)

訳: 「思春期病棟の少女たち」. 1994. 吉田利子. 草思社.

SCREENPLAY 名作映画完全セリフ集『17歳のカルテ』

関連映画:

・『カッコーの巣の上で』(One Flew Over the Cuckoo's Nest 1975)は、1962年に発表されたケン・キージーのベストセラー小説の映画化で、州立精神病院に逃げ込んだ主人公が社会や管理体制に反撥し、人間の尊厳を問う映画なので、『17歳のカルテ』(Girl, Interrupted 1999)の引き合いによく出される。アメリカン・ニューシネマの代表作の1つとして高く評価され、アメリカ映画協会によるアメリカ名作映画のリストにも載せられている。

第48回アカデミー賞 作品賞/監督賞/主演男優賞/主演女優賞/脚色賞の主要5部門を独占。

監督: ミロス・フォアマン 製作: ソウル・ゼイツ、マイケル・ダグラス

原作: ケン・ケーシー 脚本: ローレンス・ハウベン、ボブ・ゴールドマン

主演: ジャック・ニコルソン

・『シャッターアイランド』(Shutter Island 2009)は、大戦やナチスのユダヤ人虐殺を目撃したトラウマを抱える主人公を描いている。シャッターアイランドは、精神疾患のある暴力をふるう犯罪者を隔離して収容する孤島の刑務所。今後、多様な意見がでて評価が異なるといって当然という、映画である。

[映画情報]

日本初公開年月 2000/09/02 © Sony Pictures Entertainment. Co

監督: ジェームズ・マンゴールド.

出演: ウィノナ・ライダー/アンジェリーナ・ジョリー/クレア・デュヴァル/ウービー・ゴールドバーグ

DVD: ソニー・ピクチャーズ エンターテインメント

© 2007 m.tsukada. All Rights Reserved.